女性学評論　第32号　Women's Studies Forum No. 32（March 2018）pp. 199-217

講演録

バングラデシュ農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のためのNGOとの共同研究
―アンケート調査の分析からみる農村女性の実態―

浅　田　晴　久

Collaborative Research with Local NGO for Improving Reproductive Health of Rural Women in Bangladesh: Results from Questionnaire Survey

ASADA Haruhisa

奈良女子大学研究院 人文科学系 准教授
連絡先：浅田晴久　asada@cc.nara-wu.ac.jp

○浅田　奈良女子大学の浅田と申します。本日はお招きいただき、大変ありがとうございます。

本日のタイトルは標題のとおりですが、私はジェンダーの専門家ではありません。奈良女子大学にアジアジェンダー文化学研究センターという機関がありまして、ここは主としてアジアの女性の問題を研究するところで、私は元々バングラデシュやインド東部で農村調査をやっていたので、その関係でセンター長から協力の依頼があり、ジェンダーについて勉強させていただいているという状況です。センター長であり文化人類学の専門家でもある松岡悦子先生が科研費のプロジェクトを2015年度から開始されておりまして、私も分担者として加わっているので、本日はその内容を紹介したいと思います。まだ分析途中で、結論らしい結論も言いにくいのですが、現地の雰囲気だけでも伝わればと思います。

私は現在、文学部のかつての地理学科というところに所属しておりまして、授業も人文よりはどちらかというと自然を対象としています。バングラデシュといいますと、洪水やサイクロンなど自然災害がたくさん発生するところでして、卒論を書くときにたまたま当時の指導教官がプロジェクトをしていたので、バングラデシュの洪水と農業の関係から出発したのですが、その後も自然と社会の関係についていろいろと調査をしております。

今回のプロジェクトには、ほかにも農業経済学を専門とされている青木美紗先生、看護学の五味麻美先生、嶋澤恭子先生にも加わっていただき、今年が4年間プロジェクトの3年目になります。

研究の目的はそれぞれバラバラで、私がもっとも興味あるのは、農村における村人の生活行動・空間移動というところになります。青木先生は経済活動を担当されたり、嶋澤先生は病気対処行動、松岡先生と五味先生はリプロダクションにかかわる実態を担当されたりと、流行の言葉ではマルチディシプリナリーと言いますが、現地NGOの活動について複数の側面から考察するというプロジェクトを進めています。

全体の研究計画は、1年目にカウンターパートのNGOの活動を把握して、

調査地域で予備調査を行う。その後、２年目、３年目と調査を繰り返し、途中に現地でセミナーも開催して、最終的には我々が調査をした結果とNGOが活動している内容を比較するといいますか、彼らの活動を相対化して、住民とNGOと我々外部の研究者の間でよりよい開発の可能性を考えようという理念で行っています。外からの押しつけではなく、地域の実態を理解して、その実態に即したような開発、具体的には女性のエンパワーメントの方法を提案するというのが最終的な目標であります。

バングラデシュの概要を地図で説明すると、インド亜大陸の一番東の端に位置する国になります（図１）。インドとミャンマーの間に挟まれている比較的小さい国、日本の４割ぐらいの面積の土地がバングラデシュの国土で、昔は東パキスタンと呼ばれていて、1971年にベンガル人の国―それがバングラデシュという意味ですけど―として独立した比較的歴史の新しい国になります。

国内にはガンジス川、ブラマプトラ川、メグナ川という大河川が流れています。インドから流れてくるガンジス川はインド国内で海に出るのではなくて、河口部はバングラデシュになります。ブラマプトラ川もヒマラヤの北、チベットから流れてくる川です。ほかにメグナ川という川が流れており、バングラデシュは３つの巨大な国際河川が合流するところで、あえて言うと、国全体が川の中州にあるような、非常に自然環境のスケールが大きい国です。洪水が頻発するとともに、春と秋にはサイクロンが沿岸部を襲ったりもします。

14.7万平方キロメートルの国土に1.6億人が暮らし、今でも非常に人口増加率が高くて毎年増加しているのですが、人口密度は都市国家を除いては世界最多と言われております。国民の90％がムスリムで、９％ほどはヒンドゥー教徒もいて、仏教徒は南東部のチッタゴンという標高が高い丘陵地にいて、そのあたりには少数民族、先住民が住んでいたりします。

１人あたりのGDPは低いのですが、近年はユニクロも進出して、現地で服をつくるだけではなく、バングラデシュの中間層をターゲットにダッカ市

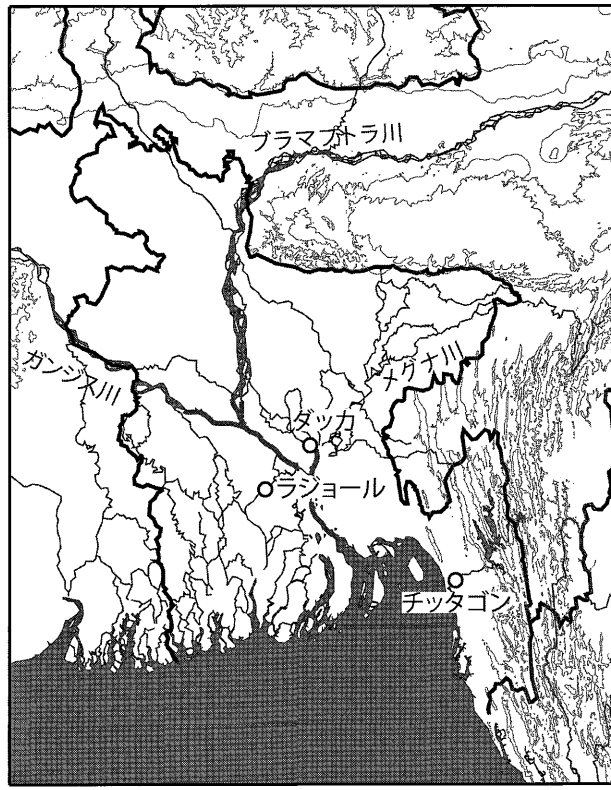

図１　調査対象地域

内に小売のお店をオープンするなど、経済成長が進んでいることもニュースになったりします。

バングラデシュにおける開発目標の達成状況ということに移ります。昔はアジアの最貧国と呼ばれていたのですが、貧困から脱却しつつあるというのが最近のバングラデシュの評価で、優等生として非常に評価が高いのです。外からの援助を受け入れて、その結果が目に見えて出ているという評判です。

例えばミレニアム開発目標では８つの指標があるのですが、貧困ギャップ

率の低下や初等教育の入学率など、2015年の達成期限を待たずに早々に達成している指標もありますし、目標達成とまでは行かなくとも、初等・中等レベルの男女格差が解消されたり、幼児死亡率や5歳未満児死亡率が大幅に低下したりするなど、各指標で大きな改善の動きがみられています。そのような活動に草の根レベルでかかわっているのがNGOになります。

バングラデシュ政府が出している開発目標のプログレスレポートの最新版から、いくつかのジェンダー関連の指標を取り出してみると、初等・中等レベルではほぼ男女比のギャップがなくなっているのですが、高等レベルにおいても、0.7〜0.8とかなり1に近づいて改善傾向にあります。しかし非農業部門における女性の雇用状況は30.2%にとどまっています。男性100に対して女性の労働者が3割しかいないということで、まだまだ労働部門への進出が遅れていることも分かります。妊産婦の死亡率は、1991年と比べてここ20年間で顕著に低下はしているのですが、都市部は非常に低下をしているのに対して、農村部は先進国と比べてもまだかなり高い値を示しております。Births attended by Skilled Health Personnel、つまり専門技術者による出産立ち会い件数は顕著に伸びています。このように、ジェンダー関連の指標も改善はしているのですが、果たしてそれだけでバングラデシュの女性が幸せになるのかどうかというのはまた別問題なので、そういったことにも問題意識を置きつつ調査を進めております。

カウンターパートのNGOと協力して調査を行いつつ、NGOの活動を相対化するということを目標にしておりまして、NGOのほうでも外部評価を求めているというか、自分たちのやっていることを外からの目で正当化してほしいということを期待されていまして、必ずしもNGOの活動を褒めるだけではありませんが、それも目標になっています。

NGOの名称はGUP（Gono Unnayan Prochestaの略で、英語ではpeople's development efforts）といいまして、「人々の発展のための努力」という意味です。松岡先生が20年ほど前に母子健康保健を調査されたときにこちらのNGOにお世話になったらしく、個人的なつてをたよりに、今回も調査に協

力してもらいます。

1973年設立で、スタッフは386名おります。バングラデシュというのはNGO大国で、グラミンバンクやBRACという有名なNGOになると、スタッフだけで数万人、予算も数百億円規模と、巨大企業並みになります。バングラデシュでは民間企業が日本ほど発達しておらず、政府以外の仕事は全部NGOというほどNGOが社会に浸透しています。大卒の若者も、政府の公務員になれなかったらNGOのスタッフに就職するのがエリートコースと考えられているほど、高い位置づけです。

このNGOの創設は1973年になります。バングラデシュが独立したのが1971年ですが、その際は平和裏に独立が達成されたわけではなく、パキスタンとの間で戦争になり非常に大勢の犠牲者が出ました。独立直後に、欧米の支援団体、クェーカー教団体などが入って、復興の手助けをしました。その復興活動に当時、非常に学生運動が盛んなところですから、大学生をしていた初代のディレクターが参加して、欧米の団体が引き上げた後にその事業を引き継ぐ形で設立されたのがこのNGOの設立背景です。よそのNGOも、独立戦争の後の復興から活動を始めたというケースが多くみられます。

現在は、首都ダッカのオフィスと、地方2カ所、ラジョールとチッタゴンというところでも活動されています。現在の事業内容はパンフレットによると、経済活動、社会支援、公衆衛生、食料保障など多岐に及びます。

我々の調査地域ラジョールまでは、首都のダッカからガンジス川をフェリーで越えて、車で約7時間かかります。独立戦争のときに、そこが一番荒廃して、被害もひどかったので、欧米系の団体が入って活動したのがきっかけだそうです。そこにNGOのオフィス兼ゲストハウスがあります。そこで4、5日滞在して調査を行うわけですが、今回は多少性格が異なる2つの村を調査のために選びました。合計で約500世帯が対象になります。

村の中にはモスクがあり、毎日決まった時間になるとそこでお祈りをしています。村にはヒンドゥー教徒もいるので、その寺院もあります。村人の屋敷はトタン屋根が多くて、決して裕福ではないのですが、バングラデシュの

中ではそこまで貧しくもないという位置づけです。日本人の目からすると貧相に映るかもしれないですが、極貧というイメージは全く当てはまりません。村の中にはバンという、電動モーターつきの自転車の後ろに荷台をつけたようなものも走っています。

当初の計画では、年度ごとに段階を踏んで調査を進めるつもりだったのですが、2015年9月に予備調査を行った直後に、現地在住の日本人が銃で狙われるという事件が発生して、その後の調査がしばらく延期になりました。もうそろそろ行けるかなと思っていた頃、2016年7月にダッカでテロ事件が発生し、日本人やイタリア人が犠牲になったので、当面の間は行くべきではないということで今でも困っている状況です。なかなか状況が改善しないので、現地大学の研究員と大学院生にアンケート調査を依頼するという形に切り替えて、プロジェクトを継続することにしました。NGOのスタッフに調査を依頼するとどうしてもバイアスがかかってくる恐れもありますので、第三者の目で調査をする方法をとっています。

調査では、5つのモジュールからなる16ページの質問票を用意しました。モジュールAは世帯基礎情報ということで、全メンバーの調査にも共通する必要事項ですので、世帯の名前、年齢、性別、学歴、職業、収入などを聞きます。モジュールBは青木先生担当のマイクロクレジット、モジュールCが松岡先生・五味先生担当の母子保健や出産行動、モジュールDが嶋澤先生担当の健康状況、モジュールEが浅田担当の女性の行動様式になります。本日は、分析した結果の一部を紹介したいと思います。

まずモジュールAの分析結果から紹介します。

まず2つの村の住民属性をみるため、人口ピラミッドをつくってみたところ、10代の人口が一番多くて、ゼロ歳代が落ちついてきている、つまり出生率が低下してきていることが分かりました。40代の男性が顕著に減っているのは後で紹介する出稼ぎの要因も示唆されます。人口の宗教別の比率は、Gobindapur村はほぼ全員ムスリムで、Khalia村はムスリムとヒンドゥーの割合が半々という、バングラデシュの中では珍しいタイプの村になっており

ます。

住民の学歴をみると、学校に行っていない illiterate の割合が男性で25％、女性で30％以上と、特に高齢者で多い一方で、学士号とか、修士号を取っている人も少数いたりもします。女性のほうが７年生、８年生、９年生あたりでドロップアウトする人の割合が多くて、男性は10年生（およそ15～16歳）でドロップアウトする割合が高くなっています（写真１）。10年生より上の後期中等・高等レベルになると、顕著に男性のほうが女性よりも比率が高くなっております。これは結婚年齢も関係しています。女性はどうしても10代で結婚する人が多く、結婚すると同時に学校をやめるという影響があります。２つの村を比べると、ムスリムのほうが初婚年齢は低くて、結婚する割合が多くなるので、進学率も低くなるという傾向がみられます。

次に、男性と女性の職業を見たところ、男性は農業の自営が最も多く、２番目は、海外出稼ぎです。その次に、雇用されていない（求職中）、農業労働者、ドライバー、自分の店の経営などになります。どちらの村も農業関係者の割合が非常に多く、正規職、例えば公務員とか NGO スタッフというのは農村部では高給取りとして羨望のまなざしなのですが、それらはごく少数

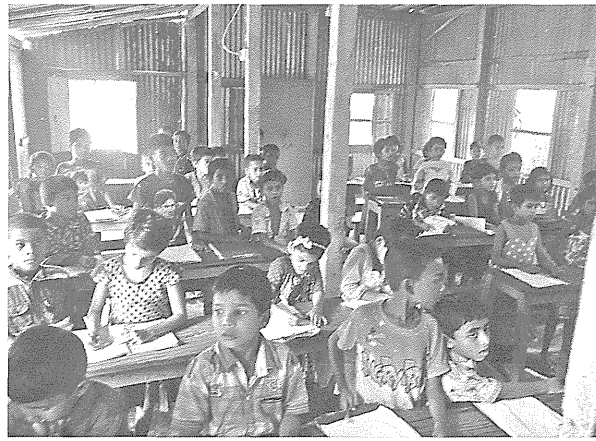

写真１　NGO が運営する学校

で、せいぜい１～２％ほどしかいません。村に住んでいる限り、農業労働や日雇いといった仕事しか就けないことがうかがえます。

女性はどうかといいますと、ヒンドゥーとムスリムでほとんど差がみられません。最も多いのが主婦、次に雇用されていない、農業自営者で、これらで９割以上を占めております。海外出稼ぎや教員という人もごく一部にいます。NGO スタッフというのもわずかにいますが、ほとんどの女性は家の中で過ごしているということがうかがえるかと思います。

男性の海外出稼ぎが多いということですが、全部で約500世帯あるうちの、４分の１の世帯が、１人ないしは複数人の海外出稼ぎを出しています。ちなみに出稼ぎに行くのは男性が163名であるのに対し、女性は５名だけでした。男性の出稼ぎの約６割は既婚者です。つまり夫が海外に出稼ぎに行って、しかも数年間というスパンで家を空けて、その間は女性しか家にいないという状況がみられます。

出稼ぎ先で一番多いのが、意外かもしれませんが、イタリアになります。縫製業とか造船関係のようです。あとは建設労働者などもあるかもしれません。マレーシアが２番目に多くて、あとは中東が多いです。オマーン、サウジアラビア、ドバイ、クウェート、リビア、ギリシャもありますね。日本にも２人ほど出稼ぎに行っているようです。

続きまして、村の中でどのような人が NGO に参加しているかを調べたところ、圧倒的に女性が多いということが分かりました。これはムスリム、ヒンドゥーは関係ありません。どういう女性かというと既婚者ですね。ほぼ９割方、結婚してから NGO の活動に参加するという女性が多くて、年齢は10代は少ないのですが、20代、30代、40代が多いです。割と幅広い年齢の女性が参加しております。NGO に参加している女性の学歴をみると、illiterate から10年生、11年生ぐらいまでは一定の割合であるのに対して、12年生以上、つまり高学歴の女性は割合が低くなる傾向にあります。

あと、経済的にどのような状況の世帯が参加しているかをみると、やはり土地所有面積が小さい、収入もやや少ない世帯が多く参加をしているという

傾向が読み取れます。NGO に参加している世帯だけでなく、参加していない世帯にも理由を聞いたところ、経済的に困窮していないから必要ないという回答が多くて、あとは利子が高いからとか、そもそも NGO を信用していないとか、ほかの村人が苦しんでいるからとか、そういう回答がみられました。

続いてモジュールＢのマイクロクレジットに関して説明をいたします。

ご存じの方もおられるかもしれませんが、マイクロクレジットというのは銀行から融資を受けられない人、特に農村の女性に少額のお金を貸し付ける制度で、そこから事業のアドバイスや研修を受けながら、自分でお金を稼いで返済していくというものです。利子率は年間12％と結構高いのですが、これでも銀行から借りるよりは少し低いのです。銀行は審査があり、必ずしもお金を貸してくれるとは限らないので、やはりこういうサービスのほうが農村の女性にとっては利用しやすい形になります。

NGO は設立当初は海外から支援を受けることで経営を成り立たせていたのですが、やはり経済的に自立しないといけないということで、収益事業としてマイクロクレジットに力を入れているようです。この GUP でも、マイクロクレジットが活動の柱となっております（写真２）。

ここでもジェンダーの問題がありまして、女性に貸し付けると独り占めせずに家族のことに利用してくれる。それにしたがって家庭内のジェンダー平等の実現につながるということも指摘されています。女性は非常に有能な借り手である一方、男性は金を借りたすぐそばから、つまらないことに浪費してしまうという見方もあります。

女性が事業に携わることによって、家庭内における地位向上とか家計の安定化を図ることも可能になると言われていますが、課題もたくさんあって、必ずしもいい話だけではありません。利子率が高いので、返済できなくなる、あるいは多重債務に陥る可能性なども指摘されております。今回の調査では、全世帯にマイクロクレジットの利用経験を尋ねて、その全体像を明らかにすることを目標としております。

写真２　マイクロクレジットのミーティング（水垣源太郎氏提供）

NGO のアニュアルレポートを見ると、やはり成功例しか見せないのですね。例えば女性がマイクロクレジットで牛を飼育して、そのミルクを売って経済的に豊かになりましたとか、ポジティブなことしか書かれていないのですが、実態はどうなのか紹介したいと思います。

まず借入先機関をみると、この地域を拠点に活動している GUP が一番多いのですが、それ以外にもグラミンバンクや ASA というバングラデシュで全国展開している有名な NGO も利用されています。BRAC というのも多角経営している有名な NGO ですが、複数の NGO がこの地域に入り込んでいるということが分かりました。

それを年代別に分析したところ、この地域では1980年からマイクロクレジット事業が始まっていて、2000年代後半、特に2006年あたりから非常に件数が多くなってきます。借り入れ先も増えているというのが特徴になっています。

借入金の変化をみると、１回あたり１万～２万タカ（１タカは約1.4円）ぐらいの額が多くなっており、ほぼ世帯の月収に相当するような額を借りているようです。少額融資というイメージがありましたが、実際はかなり大き

い金額を借りているということが分かりました。特に近年は額が大きくなる傾向にあり、３万タカとか４万タカ以上という割合が増えています。

では借りたお金で女性は何をするのかと言いますと、そのお金でビジネスを興して返すというのが本来の理念ですから、やはりその目的が多いのですが、家の修繕のため、家族のため、健康問題、子供を海外に送るとか、必ずしもお金を増やして返すという目的にかなっていない、個人的な理由でマイクロクレジットに手を出すという女性もかなりの割合でいます。特に問題なのは、ほかのローンを返済するために、また新しいマイクロクレジットに手を出すという人の割合がここ５、６年で増えているということです。

実際にどのような事業を行うかというと、ジュートの栽培・販売や、稲の栽培・販売などが多くて、その次が牛の飼育になります。食料・雑貨店経営、バンを用いた事業など、その他いろいろな事業が展開されています。

稼いだお金で返済できればいいのですが、返済金の出所をみると、事業の利益で返済している女性は比較的少なく、ほかの家族が働いて得た利益で返す割合が多くて、やはりマイクロクレジットというのは、必ずしもうまくいっていない可能性があります。少なくとも本来の理念からはややかけ離れていて、ギリギリの生活を回すために使われているというケースも比較的多くあることがお分かりいただけるかと思います。

次にモジュールＥの結果に移ります。

バングラデシュを含むムスリムの国では、ペルシャ語でカーテンとかベールという意味のパルダという規範があります。女性はむやみに外に出ず家の中で過ごすのが美徳であるというものです。女性の代わりに男性が外に出かけていって買い物をしたり、外で仕事をしてお金を稼いだりするというのがイスラムの美徳なのですね。このパルダ規範を守るのがよい女性と言われております。

市場経済の浸透や、開発の波、NGO が入ることによって外部との接点が増えて行動範囲が広くなってきたとする研究がある一方で、さほど外に出ることなく従来の親密圏の中で活動が行われているという研究もありまして、

では実際にこの調査地ではどのような行動の変化がみられるのかということを調べてみました。

サンプル女性153名に聞いたところ、約３分の２がNGOの参加の経験がありまして、内容はほとんどがマイクロクレジットでした。ほとんどの女性は、NGOイコール、マイクロクレジットの提供機関としてとらえているようです。ここでは、NGO活動に全く参加していない人、５年以下参加している人、６年以上参加している人に分けて、３つの区分でどのような行動の違いがあるかということを確かめたいと思います。なお、NGO参加年数による３区分と年齢構成を確認すると、やはり参加年数が長いほど年齢も高くなるという傾向があります。

まず、家事への参加はほぼ全員の女性でみられます。統計的には差がみられないのですが、子供の世話、隣家との会話、来客の対応のほか、薪の収集、家畜の世話、樹木の管理、牛ふんの収集など、戸外で行われる仕事の比率は、NGOの参加年数が６年以上の女性で高くなるようです（写真３）。

次に、農作業への参加をみます。やはり農作業は戸外で行われますので、一切参加しないという女性も結構います。NGO未経験者や経験年数５年以

写真３　牛ふんを固めてつくった燃料

下の人は農作業に参加しないという人が多いのですが、NGO経験6年以上の女性になると農作業に参加する比率が高くなって、収穫作業、農地の作業、野菜・果樹の植えつけ、水やり、物資の運搬などが有意に高くなっています。これがNGOの影響なのか、30代、40代の女性が多いという年齢のせいなのかは、はっきりとは区別できません。

訪問場所の変化をみると、NGOの活動歴が長いとより遠くの場所を訪れる割合が多くなると予想していたのですが、そのような傾向はみられないようです。NGO活動に関連して、外に出かける女性が多くなるというのは有意にはみられないですね。

訪問時の手段に関しましては、NGO経験6年以上の女性は徒歩で移動する割合が有意に高く、同伴者をともなわず1人で外に出かけるという割合も多くなっております。NGOに参加していない人は、子供や夫、親戚、誰かが同伴して出かけるという傾向がみられるようです。

NGOに参加する前と後で、訪問場所がどのように変化したか、1日の時間の過ごし方がどのように変化したかについても聞きました。参加した後は、やはりたくさんの場所を訪れるようになった、1日の時間も忙しくなったと答える人が多くみられました。この解釈は難しいのですが、NGO活動のせいで遠方に出かけるようになったというよりは、村の中や周辺など近場で動き回るようになったというイメージでとらえています。

最後は、モジュールBの農村女性の妊娠・出産の実態についてです。

最初に述べたとおり、バングラデシュではNGOの活躍などもあり、妊婦の死亡率が下がるとともに、乳児の死亡率も非常に安定してきているという事実があるのですが、我々は、必ずしも医療の近代化が女性の幸福や母体の健康に結びつくとは限らないだろうという考えで、そのような先進国がかつて歩んだ道をバングラデシュに歩ませないために、何かオルタナティブな方法がないかということを模索しています。

バングラデシュでは、黒い服を着ている産婆、ダイと言いますが、この女性が各家を回って、伝統的な方法で子供を取り上げていたそうです（写

真４）。家で子供を産む割合も高かったそうです。これに対して、NGO のレポートを見ると、いかにも白衣を着て、非常に近代的な、衛生的な状況で各種の治療を提供しているということがアピールされています。医療の近代化がどのような結果を招いているのかということが我々の関心事です。

女性の結婚年齢は、非常に早いです。14歳以下で結婚する割合が全女性の３割います。早婚の割合が高いのは、必ずしも昔に限った話ではなくて、今でも14歳以下の年齢で結婚する女性が約４割います。

母親がどこで子供を産むか、についても年代別に調べましたところ、2000年代後半以降になると、クリニックや診療所といった、自分の家や親の家以外で産むケースが増えてきています。介助者も伝統的な産婆ではなくて、SBA（Skilled Birth Attendant）、つまり専門技術者や医師が介助する割合が非常に増えています。

分娩形態も、正常分娩から徐々に帝王切開に移行しつつあります。帝王切開すると母親の体にダメージが残りますので、我々はそういうことも非常に危惧しております。全体としては５％ですけど、その割合は増えてきているということですね。

写真４　伝統的な産婆ダイ（松岡悦子氏提供）

出産の場所についての感想は、自宅と病院・クリニックのどちらが良いかというのは統計的な差はみられませんでした。統計的に有意ではありませんが、自宅のほうがよかったと答える人が割合としては半分以上を占めております。

次に産後の気分についてです。マタニティーブルーズが3割ぐらいの割合でみられて、産後も幸せという回答が半分以上なのですが、幸せでないという人が一定数みられるということも問題視しています。誰に産後を手伝ってもらったかというと、母や姑など、同性から手伝いを受けた人の割合が高くなっています。母乳の期間は人によってばらばらであるようです。

最後に全体のまとめになりますが、調査を行った地域は、バングラデシュの中では比較的経済的には恵まれているようですが、貧困世帯の多くはマイクロクレジットを通してNGOとのかかわりを持っています。NGOとかかわりを持つことで、確実に以前とは生活の様式が変化してきているようですが、果たしてそれが女性の幸せに結びついているのか、ポジティブな影響があるのかネガティブな影響があるのかという点についてはまだ判断できないので、今後は定性的な調査もしないといけないと思っています。現時点ではアンケート結果から以上のような傾向がみられたということで、これで発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

○司会　ありがとうございます。あまり時間がないのですけど、もし御質問のある方がいましたら。

○浅田　なかなか日本と状況が違うので、想像していただくのが難しいかもしれませんね。ただ、バングラデシュは一般的には非常に貧しい国と言われているのですが、食べ物に困るとか、お金がなくて困っているという意味での貧しさは全くなくて、特にここの村は、ムスリムとヒンドゥーが仲よく暮らしていて、NGOとの距離も近いようでした。松岡先生も、昔は裸ではだしの子供が多かったのが、今はみんな服を着ているというので驚いておられました。

○司会　ほかにいらっしゃらなければ、私、ちょっと質問させていただきたいのですが、いろいろ見せていただいたグラフの中で、20代から30代の女性の数が少ないということは、やはり出産で亡くなる人がそれなりにいるのかなと思ったのです。自宅出産とかクリニックでの出産とか、その詳細も見せていただけるとよいのですが。

○浅田　今回は時間がなくてそこまで分析が進んでいないのですが、昔ながらの自宅出産の事例と病院・クリニックの事例で、どのような違いが見えるかという分析は必要だと思います。しかし、亡くなるケースが多いせいで人口に差が現れるというわけではないと思います。

○参加者　女性はほとんど主婦という統計があったと思うのですが、一方でマイクロファイナンスは女性に貸し出していて、その利用理由は事業のお金というのが一番多いとなっていますよね。その事業というのは、そうすると自分のというよりは旦那さんのというふうに……。

○浅田　そのあたりは聞き方の問題もあると思います。主婦といっても、必ずしもほかに全く仕事がないというわけでもなくて、基本は家の中で過ごしても、昼間の空き時間などは、マイクロクレジットによる事業も行う、牛を飼育する、家の農業、米とかジュートの栽培も手伝うという意味合いもあるのかなと思います。

○参加者　要するに家で農作業をしていても、自分は主婦であると分類する人も。

○浅田　多いと思います。それはその人の家にもう一回行って、個別に状況を確認しないといけない。数字のデータをうのみにはできないと思います。

○司会　私たちの今の生活では想像しにくいのですけど、一昔前だと日本でも庭で野菜つくったりとか、ニワトリを飼っていたりとか、そういうのが当たり前だったのです。それも家事の範疇に入ってしまう。

○浅田　そうですね。特に村の人は、必ずしも１つの仕事だけで食べているとは限らなくて、農業もやって家畜も育てて、ちょっとしたビジネス、モノを売りに行ったりとか、そういうこともありますので、単純に自己申告に基づ

く結果だけでは何とも言えないです。定性的なサンプル事例とかを組み合わせないと、これだけでははっきりしたことは言えないですね。

○参加者　早婚が多いのも伝統的にそうだということだと思うのですけど、理由が何かあればということと、あと未婚とかは余りないのか。

○浅田　今日はお見せしてなかったのですが、未婚のケースもあります。離婚も数件あります。早婚の習慣はここに限らず、イスラムの国はどこでも当てはまると思うのですけど、女性は勉強をしても外の仕事につくことは少ないので、勉強をするよりは早いこと養ってくれる男性を見つけて、嫁ぐべきだという考えだと思います。

○参加者　行動範囲とか、早婚がどうかというのはヒンドゥーとムスリムではやっぱり差が出てくるのですか。

○浅田　ムスリムのほうが早婚で、ヒンドゥーのほうが初婚年齢は高いと思います。よく言われる説明としては、ムスリムは結婚相手を自由に選べるのですが、ヒンドゥーはカースト、ジャーティがありますので、結婚できる相手が限られるのですね。その分、結婚相手を探すのがムスリムよりも難しくなるということはあります。

○参加者　行動範囲の違いはあるのですか。

○浅田　私も最初はムスリムとヒンドゥーで分けて分析をしようと思ったのですが、いろいろ観察したり話を聞くと、そこまで違いがみられない。もちろん宗教的なお参りとか食習慣とかは違うのですが、ムスリムもヒンドゥーも同じくらい外に出て、そこまで差は出ないという話を聞いております。ですので、今回はまとめてNGOの参加年数で分けて考えてみました。

○参加者　文化的にはある程度集合して一様になってしまっているような感じですかね。

○浅田　村の中では、ムスリムがたくさん住んでいる地区とヒンドゥーが住んでいる地区で分かれてはいるのですが、完全に別々に暮らしているわけではなくて、ムスリムもヒンドゥーのお寺に参ったり、ヒンドゥーもムスリムのモスクや、祭りに参加したりと、草の根レベルではそこまで宗教の差という

のは意識されずに生活しているということでした。

○参加者　学校がその村にどれぐらいあるのか、小学校、中学校までが圏内にあるのかということと、あと結婚制度とか、私よく分からなくて、一夫多妻制か。

○浅田　一夫多妻制はもちろんイスラムでは認められていますので、経済的に養えるのであれば、全く問題がないということです。この村でもいくつかそういうケースがあったと思います。現在も続けられている制度ではあります。ただ、本当に数例で、ほとんどは一夫一妻です。学校は、この村から通える範囲では、小学校、中学校、高校は全てそろっています。テケルハットやラジョールというところは、ちょっとした中心の町なのですが、そういうところには高校もあるけれど、カレッジレベルになると、ここからやや離れた場所まで行かないと、バスに乗っていかないとないかもしれないですね。徒歩で通える圏内に学校があるかどうかというのは女性にとって重要ですね。ありがとうございます。

○司会　では、ありがとうございます。

○浅田　すみません、時間が長くなって申しわけなかったです。

○司会　いえいえ、とんでもありません。じゃあ一応研究会のほうはここでお開きにしたいと思います。本当に今日は浅田先生、ありがとうございました。

○浅田　ありがとうございました。